

participation were associated with changes in psychological distress level among older men and women.

【Methods】 Two thousand seven hundred community-dwelling older adults (aged 65-74 yr) were randomly selected from the resident registry of 3 cities in Japan. Of those, participants without psychological distress (Kessler 6<5 points) and reporting social participation level at baseline in 2010 were followed. Psychological distress was evaluated based on K6 Scales at both baseline and follow-up. Social participation level was examined using question items from the National Health and Nutrition Survey in Japan and exploratory factor analysis was used to derive the underlying factor structure. Multiple linear regression analysis was used to examine association between social participation and changes in psychological distress level after adjusting for covariates stratified by gender.

【Results】 Six hundred sixty seven older adults (55.8% men) were included in this analysis. Social participation was categorized into 2 types after factor analysis: community involvement (e.g. local events) and individual relationship (e.g. friendship). During the 5-year follow-up, 31.6% of participants reported deterioration in psychological distress. Higher community involvement level was independently associated with lower risk of psychological distress for older women ($\beta=0.136, p=0.038$), whereas individual relationship level was not related both gender.

【Conclusion】 Promoting community involvement may be an effective strategy for mentally healthy aging.

P2-38.

東京医科大学教育 IR センターで実施した卒業時アンケートの結果と学生の意識

(教育 IR センター)

○菰田 孝行、河上 恵、荒井 貞夫
(生物学、教育 IR センター専門委員会)

篠田 章

(公衆衛生学、教育 IR センター専門委員会)

井上 茂

(医学教育学、教育 IR センター専門委員会)

R. ブルーヘルマンス

(呼吸器内科、教育 IR センター専門委員会)

瀬戸口靖弘

(総合診療科、教育 IR センター専門委員会)

平山 陽示

(耳鼻咽喉科・頭頸部外科、教育 IR センター専門委員会)

大塚 康司

(看護学科、教育 IR センター専門委員会)

小林 信、成瀬 和子、瀬戸山陽子

【背景】 東京医大教育 IR センターは、2015 年 4 月に設置された。医学科・看護学科の教育に関する諸情報を収集・分析し、教育の向上に寄与することが目的である。専門委員会には 11 名の教員が所属している。卒業直前の学生を対象にした「卒業時アンケート」他、学内における各種調査を実施している。

【目的】 東京医科大学医学部医学科にて実施された卒業時アンケートの結果を分析し、学生の意識を探り、東京医科大学の教育改善への視座を得る。

【方法】 調査時期は 2016 年 2 月。対象は東京医科大学医学部医学科 6 年生及び既卒者 133 名 (第 110 回医師国家試験受験者)。医師国家試験のオリエンテーション時に、医学科学務課員が調査用紙を配布し、記載後に回収した。調査は記名式で実施した。回答率は、62.4% (83 名回収) であった。調査内容は、① 授業や活動で身につけた能力 ② 在学中にもっと学んでおけばよかったと思うこと ③ 東京医大のカリキュラムや設備への満足度 ④ 東京医大への総合的な満足度 ⑤ 卒業後の臨床研修先、などである。

【結果】 習得能力では「国際化への対応能力」の不

足を感じていた。在学中に学んでおきたかったと感じているのは「基本的臨床手技」や「実践的英語教育」であった。カリキュラムや設備での満足では「臨床医学系科目の授業」と「臨床実習」において満足と回答した者が多く、肯定する割合は90%を超えていた。

【考察・結語】 東京医大への総合的な満足度も高く、調査対象の卒業直前の学生には、これまでの本学の教育が概ね受け入れられている結果を示しているといえる。しかしながら、卒後の臨床研修は外部病院を選択する割合が高く、一度は外の病院の経験もしてみたいという意識も垣間見られると推測される。引き続き、卒業生の動向に対する追跡調査も実施していきたい。

P2-39.

トランスレーショナルリサーチ推進部門の研究支援活動

(医学総合研究所トランスレーショナルリサーチ推進部門)

○木苗 貴秀、稲津 正人

○支援活動の背景・必要性

国立研究開発法人 日本医療研究開発機構（以下、AMED）は、医療分野の研究開発における基礎から実用化までの一貫した研究開発の推進・成果の円滑な実用化及び医療分野の研究開発のための環境の整備を総合的かつ効果的に行うために平成28年度に設立され、これまで文部科学省・厚生労働省・経済産業省に計上されてきた医療分野の研究開発に関する予算を集約し、基礎段階から実用化まで一貫した研究のマネジメントを行っている。

東京医科大学では、昨年度から本年度に渡り、AMEDから相当件数の委託（再委託含む）研究を受けており、研究成果の実績も積み上げている。これら委託研究における契約書（再委託では宣誓書）において、学会または論文等で研究成果を公表する事前に「知財様式3」による報告が義務付けられているが、AMEDから、本学からは、まだこの書式の提出がないとの現状報告があった。AMEDでは医療分野における研究成果の実用化までを目指しており、これには知的財産の確保が必須となるため、AMEDとトランスレーショナルリサーチ推進部門

が共同して、研究成果に関する発明相談、及び「知財様式3」の提出に関する周知を行い、本学の研究支援を実施する計画である。

○支援活動の内容

多忙な研究者にとって、研究成果の中に特許権利化の可能性のある発明が含まれるのか、また実際にどのタイミングでAMEDに知財様式3を提出すれば良いのかは、慣れないと判断が難しい。そこでトランスレーショナルリサーチ推進部門がAMEDからの委託（再委託）研究を実施している研究者を訪問の上で、研究の進捗及び研究成果の発表予定等をヒアリングし、研究成果の公表前にAMEDへの様式3の提出をスムーズに行う事が出来るように研究者への支援を実施する。具体的な支援の内容は、研究成果の特許性評価、知財様式3の作成に関するアドバイス、AMEDとの事務連絡等を予定している。

P3-40.

Cannabinoid-Induced Bradycardia in Rats Is Mediated by CB1 Cannabinoid Receptors

(大学院修士課程2年法医学)

○永嶋瑛利香

(法医学)

前田 秀将、吉田 謙一

【背景】 巷間に出回っている危険ドラッグは、法規制が強化された後、合成 cathinone と合成 cannabinoid 誘導体等が主流となっている。cathinone 系は覚せい剤に似て「興奮系」と呼ばれ、使用すると幻覚・幻聴・妄想などが起こり、cannabinoid 系は大麻に似て「鎮静系」と呼ばれ、使用すると急激な意識障害が起こり、使用直後に自動車を運転するとどこかに突っ込んでしまったりする。このような事件は記憶に新しい。

このような危険ドラッグによる危険行動は社会問題化している。これらの機序を解明することは喫緊の研究課題である。今回は cannabinoid 系危険ドラッグに着目した。cannabinoid には中枢系および血管内皮細胞に発現する CB1 receptor および末梢系に発現する CB2 receptor が知られている。合成 cannabinoid は MDMB-CHMICA を使用した。

血圧、脈拍数、血液生化学検査、主要臓器組織学検査、行動を観察し、臨床診断や法医剖検診断への